The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	表出者と被表出者の立場が怒り経験についての回答傾向に及ぼす影響
Author(s)	阿部, 晋吾; 高木, 修
Citation	対人社会心理学研究. 2005, 5, p. 15-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8177
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

表出者と被表出者の立場が怒り経験についての回答傾向に及ぼす影響[1)]

阿部晋吾(関西大学大学院社会学研究科)
高木修(関西大学社会学部)

本研究では対象者に怒りの表出と被表出の両経験を回答させて、表出、被表出という立場の違いによって、怒り経験の回答傾向に差がみられるかを検討した。その結果、怒り表出経験について回答する場合は被表出経験について回答する場合よりも、挑発による被害は大きく継続的なものであり、被表出者にその責任が大きく帰属される一方で、怒り表出による被害は小さく正当なものであり、ネガティブな結果に帰結する経験を回答する傾向がみられた。このことから、怒り表出者と被表出者のいずれの立場においても自己を正当化する動機的傾向が存在することが示唆された。

キーワード:怒り表出、自己正当化、視点の違い、被害者、加害者

問 題

怒りは、所与の社会的環境から影響を受けて喚起される感情であるが、その表出を通じて、対人関係を含めたその後の社会的環境を変化させうる感情でもある。怒りを表出することは、一般的、常識的には、否定的な結果をもたらしやすいと考えられている。先行研究においても、怒りの表出は否定的な印象を相手に与えやすいこと(木野, 2000)や、対人葛藤をさらにエスカレートさせてしまうこと(大渕, 1993)などが指摘されている。しかし、Averill(1982)、Gergen & Gergen(1988)、阿部・高木(2002)のように、怒りの表出が常に破壊的で自滅的な結果をもたらすわけではなく、対人葛藤の解決や関係の親密化といった、社会適応的な結果をもたらすことを示唆する研究もある。同じ怒りの表出が、なぜ正反対の結果をもたらすのであろうか。そのことを解明するために、怒りの表出が日常の人間関係の中で実際にどのような役割を果たしているのかを検討することは重要であると思われる。

日常的な怒りの経験に関する研究としては、日本でもこれまでに大渕・小倉(1984)がエピソード法を用いて行った研究がある。しかし、この研究では、怒りの表出者から見た経験のみが対象とされている。怒り経験についての回答傾向が表出者と被表出者とで異なることは、これまでにいくつかの研究で明らかにされている(例えば、Averill, 1982; Mikula, Athenstaedt, Heschgl, & Heimgartner, 1998; Mummendey, Linneweber, & Löschper, 1984; Mummendey & Otten, 1989)。これらの研究結果で共通していることは、被表出者は表出者よりも、(a)挑発行為を正当な理由に基づくものと評価しやすく、(b)怒り表出反応を不当なものと評価しやすい、ということである。Baumeister, Stillwell, & Wotman(1990)は、同一の対象者に怒り表出経験と被表出経験の両方を自由記述させ、その内容分析を通じて、この二つの経験内容を比較している。その結果、表出経験について回答する場合は、対象者は怒り表出の正当性を高く評価し、表出者が過去から現在に至るまで継続的に苦痛を感じていることを回答する傾向があるのに対して、被表出経験について回答する場合には、挑発には正当な理由があったと考え、怒り表出反応を過剰なものとしてとらえ、その出来事はすでに「無事に解決したこと」として回答する傾向のあることが明らかにされた。このような回答傾向を、Baumeister(1997)は、被害者バイアスとして解釈している。すなわち、怒り表出者は、挑発の不当性とそれに対する償いが未だ十分に行われていないこと強調し、その一方で被表出者は、相手の怒り表出の過剰性、不当性を強調することで、お互いが「自分こそ真の被害者である」「悪いのは相手で、自分は正しい」とみなす傾向があることを指摘している。Baumeister et al.(1990)と同様の手法を用いて、Kowalski(2000)は、「からかい(teasing)」の経験、Zechmeister & Romero(2002)は、怒りと寛容の経験をそれぞれ検討しているが、いずれの研究も加害者的立場と被害者的立場の双方の回答において相手を不当化し、自己を正当化しようとする自己奉仕的なバイアスが生じることを示唆している。

本研究は、怒り経験について表出者と被表出者の二つの立場から回答できる項目を予め選定した上で、同一の対象者に怒りの表出と被表出の両経験について回答させることで、立場の違いによって回答する怒り経験の受けとめ方に差が見られるかどうかを検討することを目的とする。同じ対象者に両方の経験を回答させる利点としては、対象者をいずれかの経験に割り当てる場合と異なり、表出と被表出の回答の差が、対象者の社会的属性やパーソナリティなどの個人特性の違いによって生じる可能性を排除できることが挙げられる(Baumeister et al.,

1990)。また、本研究が Baumeister et al.(1990)と異なるのは、自由記述ではなく評定尺度を用いる点である。これで回答の数量化が容易になり、質的分析だけでなく、状況評価や反応の量的分析によっても、被害者バイアスの内容をより詳細に検討することが可能となる。

仮説 Baumeister et al.(1990)、Baumeister(1997)に基づき、人は、自分自身の怒り表出経験について回答する場合、怒り被表出経験について回答する場合よりも、挑発事象に対する被表出者の責任を大きく帰属し、怒り表出の正当性を高く評価し、表出者がその経験以前から現在にいたるまで継続的に苦痛を感じていると回答する傾向がある、という仮説のもとで研究を行う。

方 法

調査対象者および調査方法 2001 年 12 月から 2002 年 2 月の間に大学生及び専門学校生 229 名(男性 87 名、女性 142 名、平均年齢：19.72、*SD* = 1.69)を対象に調査した。質問紙は、講義中に集団配布するか、もしくは直接個別配布し、一週間程の期間をおいて無記名で回収した。

質問紙の構成 本研究では、怒り表出(被表出)経験を「特定の 1 人の人物に対して(が)怒りを感じ、怒っていることをその相手に伝えた(伝えられた)経験」と定義し、質問紙にそれを明記した。そして、比較的記憶が鮮明であると同時に、怒りの表出に対する被表出者の反応も含めた、怒りの経験全体を扱えるデータを収集することを考慮に入れて、過去 1 週間を除く最近 1 年間の怒り表出経験の中で、最も怒りが強かった経験について回答するように求めた。また、被表出経験も、同様の期間中に、表出者の怒りが最も強かったと思われる経験について回答するように求めた。なお、過去 1 年間で表出、もしくは被表出の経験がない場合は、それ以前で最も怒りが強かった、あるいは相手の怒りが最も強かったと思われる経験について回答するように求めた。そして、各経験に沿った文章に表現し分ける以外は全く等質な質問群を用意し、表出と被表出それぞれの経験を項目間で比較できるようにした。例えば、怒り表出反応について尋ねる場合、表出経験についての質問文は「相手に対して怒りを感じた時、あなたは次のような行動をどの程度行いましたか」であるのに対して、被表出経験でのそれは「あなたに対して怒りを感じた時、相手は次のような行動をどの程度とりましたか」という質問文を用いて、表出経験と同じ反応項目について回答させた。質問紙は、最初に表出経験について回答させてから被表出経験を回答させるものと、その反対の 2 種類を用意し、それらを無作為に配布することによって順序効果を相殺した。

質問項目 質問項目は、Averill(1982)、Baumeister *et al.*(1990)、大渕・小倉(1984)を参考にしつつ、新たな項目も加えて作成した。まず、回答する怒り経験が調査の時点からどれくらい以前に起きたのかについて、「1: 1 週間以上～1 ヶ月未満」から「5: 1 年以上」までの 5 段階評定で回答させた。次に、怒り経験の相手を確認するために、怒り表出、もしくは被表出の相手となった人物の属性(「恋人」、「親」、「きょうだい」、「それ以外の家族」、「友人」、「知り合い」、「初対面」、「その他」)について回答させた。怒り経験の発端となった挑発状況については、挑発の累積度(「1:全くない」から「4:頻繁にある」までの 4 段階評定)、挑発による心理的被害度(「1:受けていない」から「4:非常に受けた」までの 4 段階評定)、挑発に対する挑発者の責任の程度(「1:責任はない」から「4:非常に責任がある」までの4段階評定)について回答させた。怒りを表出した目的については、「不公平を解消する」、「態度を変えさせる」「日頃のうっぷんをはらす」などの 13 項目(大渕・小倉(1984)の「怒りに含まれる動機」項目の表現を若干修正して使用。Table 2 参照)を取り上げ、それぞれについて「1:期待しなかった」から「4:非常に期待した」までの 4 段階評定で回答させた。怒りを感じた際に行う具体的な表出反応としては、「身体的な攻撃」、「言葉による攻撃」、「告げ口」、「冷静な話し合い」などの 13 項目(大渕・小倉(1984)の「怒りに伴う道具的反応」項目の表現を若干修正して使用。Table 3 参照)を取り上げ、それぞれについて「1:行っていない」から「4:非常に強く行った」までの 4 段階評定で回答させた。さらに、怒り表出による被表出者の心理的被害度(「1:受けていない」から「4:非常に受けた」までの 4 段階評定)、表出の正当性評価(表出反応について「当然の行為だと思った」「正しい行為だと思った」の 2 項目で、それぞれについて「1:あてはまらない」から「5:あてはまる」までの 5 段階評定)について回答させた。怒り表出に対して被表出者が選択しうる反応としては、「反発」、「謝罪」、「責任の否定」などの 14 項目(大渕・小倉(1984)の「相手の反応」項目の表現を若干修正して使用。Table 4 参照)を取り上げ、それぞれについて「1:示していない」から「4:非常に強く示した」までの 4 段階評定で回答させた。怒り表出による対人的効果としては、表出による問題の解消度(「1:悪化した」から「5:解消された」までの 5 段階評定)、表出後の親密度の変化(「1:疎遠になった」から「5:親密になった」までの 5 段階評定)について回答させた。最後に、表出あるいは被表出の結果生じる心理的効果として、結果についての満足度(「1:不満である」から「5:満足している」までの 5 段階評定)、経験の評価(「1:悪い経験だ」から「5:良い経験だ」までの 5 段階評定)について回答させた。

結 果

怒り経験の時期と相手　回答された怒り経験がどれくらい以前に生じたものなのかについては、表出経験、被表出経験のいずれにおいても「1 ヶ月未満」の経験について回答した対象者が最も多く、それぞれ 36.8%、37.6%であった。「1 年以上前」の経験について回答した対象者は表出経験、被表出経験のいずれにおいても 1 割程度(それぞれ 11.8%、14.0%)であった。

次に、怒りの経験の相手となった人物の属性の割合(Table 1)をみると、怒り表出経験について回答する際の表出対象は「友人」であることが多いのに対して、被表出経験の対象は「親」であることが多かった。なお、「恋人」は、表出、被表出いずれにおいてもその相手となることが多かった。

Table 1 怒り経験の相手の属性別割合(%)

	表出 （相手＝被表出者）	被表出 （相手＝表出者）
恋人	18.9	17.5
親	13.2	30.3
きょうだい	7.9	3.9
それ以外の家族	0.0	1.8
友人	28.1	16.2
知り合い	14.5	7.9
初対面	4.8	3.9
その他	12.7	18.4

本研究の目的は立場の違いが怒り経験についての回答傾向に及ぼす影響を検討することであるので、回答される表出経験と被表出経験の対象は極力等質であることが求められる。そこで、学生である対象者自身が怒り経験の相手と同じ属性を取る可能性の高い経験のみを抽出するために、表出経験、被表出経験のいずれかの相手が「親」、「その他の家族」、「その他」である経験を回答した被験者を除外することにした。その結果、最終的には 93 名(男性 45 名、女性 48 名)の回答をもとに以後の分析を行った。

怒り表出目的、怒り表出反応、被表出者の反応の尺度構造解明　怒り表出の目的(13 項目)、怒り表出反応(13 項目)、被表出者の反応(14 項目)について、それぞれ因子分析(主成分法、プロマックス回転)を、表出経験と被表出経験別に行った。因子寄与、スクリープロット、因子負荷量などから判断した結果、表出経験と被表出経験のいずれにおいても同様の因子構造がみられたので、両方の経験のデータを合算して、改めて因子分析(主成分法、プロマックス回転)を行った(Table2～4)。その結果、怒り表出目的については、「他者変容目的(態度を変えさせる、行動を変えさせる、など)」と「自己満足目的(苦痛を与える、日頃のうっぷんをはらす、など)」の 2 因子が抽出された。怒り表出反応については、「抑制的反応(説明を求める、

Table 2 怒り表出目的の因子分析結果

項目	*F1*	*F2*
＜*F1*：他者変容目的＞		
態度を変えさせる	0.87	-0.02
自分の気持ちを伝える	0.82	-0.18
行動を変えさせる	0.81	0.07
関係を強化する	0.63	-0.15
自分の言うことを聞かせる	0.61	0.23
不公平を解消する	0.30	0.20
＜*F2*：自己満足目的＞		
苦痛を与える	-0.28	0.80
自分と同じ思いをさせる	0.08	0.62
日頃のうっぷんをはらす	0.10	0.61
関係を断ち切る	-0.20	0.59
自分を印象よく見せる	0.09	0.55
自分のプライドを保つ	0.40	0.51
やっかいなことから逃れる	0.07	0.43
因子寄与(二乗和)	3.25	2.64

Table 3 怒り表出反応の因子分析結果

項目	*F1*	*F2*	*F3*
＜*F1*:抑制的反応＞			
説明を求める	0.76	0.26	-0.14
冷静な話し合い	0.75	0.01	-0.12
心を鎮める	0.68	-0.14	0.09
怒りと反対の表現	0.44	-0.03	0.35
＜*F2*:直接的表出反応＞			
敵意的な表情やしぐさ	-0.03	0.72	0.11
言葉による攻撃	0.13	0.67	-0.26
他の罰	-0.14	0.57	0.22
ものに八つ当たり	0.15	0.41	0.23
身体的な攻撃	-0.32	0.34	-0.12
＜*F3*：間接的表出反応＞			
第三者と相談	0.17	-0.19	0.71
告げ口	-0.10	0.13	0.62
第三者への八つ当たり	-0.15	0.30	0.58
大事なものへの攻撃	0.17	0.27	0.29
因子寄与(二乗和)	2.06	1.88	1.67

Table 4 被表出者の反応の因子分析結果

項目	*F1*	*F2*	*F3*	*F4*
＜*F1*:責任受容＞				
後悔した様子	0.84	0.00	0.08	-0.05
謝罪	0.80	-0.04	-0.08	-0.19
罪をつぐなう行動	0.77	0.02	-0.02	-0.02
指示に従う行動	0.70	-0.01	-0.02	0.09
傷ついた様子	0.66	0.08	0.16	-0.13
感謝	0.58	-0.11	0.08	0.20
＜*F2*:責任拒否＞				
責任の否定	-0.09	0.81	-0.01	0.18
反発	-0.21	0.79	0.10	-0.12
説明を求める	0.15	0.67	0.00	0.01
弁解	0.33	0.61	-0.17	0.05
＜*F3*:責任回避＞				
無関心	0.07	-0.13	0.86	0.15
無視	-0.13	0.10	0.75	-0.27
その場からの逃避	0.18	0.08	0.67	0.17
＜*F4*:ユーモア化＞				
冗談、ふざけ	-0.07	0.08	0.09	0.91
因子寄与(二乗和)	3.45	2.15	1.84	1.10

冷静な話し合い、など)」、「直接的表出反応(敵意的な表情やしぐさ、言葉による攻撃、など)」、「間接的表出反応(第三者と相談、告げ口、など))の3因子が抽出された。被表出者の反応については、「責任受容的反応(後悔した様子、謝罪、など)」、「責任拒否的反応(責任の否定、反発、など)」、「責任回避的反応(無関心、無視、など)」、「ユーモア化反応(冗談、ふざけ)」の4因子が抽出された。

立場による回答内容の比較　立場が経験の回答内容に及ぼす影響を検討するために、立場(表出、被表出)を独立変数とした対応のある *t* 検定を行った。従属変数には、「挑発の累積度」、「挑発による心理的被害度」、「挑発に対する挑発者の責任の程度」、「怒り表出による心理的被害度」、「問題の解消度」、「関係の変化」、「結果に対する満足度」、「経験の評価」の各項目の得点、「怒り表出の正当性」については「当然の行為だと思った」、「正しい行為だと思った」の2項目の合計得点(項目間の相関係数は表出経験で $r = .73$, $p<.001$、被表出経験で $r = .83$, $p<.001$)、因子分析を行った「怒り表出目的」、「怒り表出反応」、「被表出者の反応」については各因子の因子得点を使用した。各立場における従属変数の平均値をTable 5に示す。なお、因子分析を行った従属変数については得点水準に基づいた結果の解釈を容易にするために、Table 5には各因子に負荷する項目の合計点を項目数で除したものの平均値を示した。

まず被害状況に対する回答においては、挑発の累積度、挑発による心理的被害度、挑発に対する挑発者の責任の程度のいずれにおいても有意な差がみられた(それぞれ $t = 3.05$, $p<.01$; $t = 5.35$, $p<.001$; $t = 4.43$, $p<.001$)。すなわち、表出経験について回答する場合の方が被表出経験について回答する場合よりも、同様の挑発が過去に何度もあり、今回の挑発による心理的被害も大きく、その責任は挑発者にあると回答しがちであった。怒り表出の目的については、他者変容目的、自己満足目的のいずれにおいても有意な差はみられなかった(それぞれ $t = -0.51$, *ns*; $t = 0.52$, *ns*)。怒り表出反応については、直接的表出反応と、間接的表出反応において有意な差がみられた(それぞれ $t = -3.74$, $p<.001$; $t = 4.69$, $p<.001$)。すなわち、表出経験について回答する場合の方が被表出経験について回答する場合よりも、表出者は直接的表出反応を弱く、間接的表出反応を強く行ったと回答しがちであった。抑制的反応には有意な差はみられなかった($t = 1.55$, *ns*)。また、表出による心理的被害と、怒り表出の正当性評価にも有意な差がみられた(それぞれ $t = -3.77$, $p<.001$; $t = 4.86$, $p<.001$)。すなわち、表出経験について回答する場合の方が被表出経験について回答する場合よりも、表出による被表出者の被害は少なく、表出は正当であると回答しがちであった。表出反応に対する被表出者の反応については、責任受容的反応に有意差がみられた($t = -2.31$, $p<.05$)。すなわち、表出経験について回答する場合の方が被表出経験について回答する場合よりも、被表出者が責任受容的反応を弱く示したと回答しがちであった。責任拒否的反応、責任回避的反応、ユーモア化反応には有意な差はみられなかった(それぞれ $t = -0.66$, *ns*; $t = -0.07$, *ns*; $t = 0.57$, *ns*)。表出の対人的効果については、関係の変化において有意な差の傾向がみられた($t = -1.67$, $p<.10$)。

Table 5　各立場における平均値(標準偏差)とその差の検定

従属変数	表出 *M*	(*SD*)	被表出 *M*	(*SD*)	*t* 値
挑発の累積度	2.61	(1.01)	2.17	(1.07)	3.05 **
挑発による心理的被害度	3.29	(0.75)	2.70	(0.98)	5.35 ***
挑発に対する挑発者の責任	3.16	(0.89)	2.59	(0.87)	4.43 ***
他者変容目的	2.20	(0.76)	2.22	(0.73)	-0.51
自己満足目的	1.57	(0.49)	1.54	(0.57)	0.52
抑制的反応	1.86	(0.67)	1.68	(0.68)	1.55
直接的表出反応	1.76	(0.50)	1.94	(0.59)	-3.74 ***
間接的表出反応	1.53	(0.53)	1.33	(0.45)	4.69 ***
怒り表出による心理的被害度	2.17	(1.00)	2.72	(1.11)	-3.77 ***
怒り表出の正当性評価	7.71	(2.20)	5.91	(2.66)	4.86 ***
責任受容的反応	1.68	(0.75)	1.89	(0.77)	-2.31 *
責任拒否的反応	1.70	(0.70)	1.81	(0.73)	-0.66
責任回避的反応	1.61	(0.72)	1.67	(0.78)	-0.07
ユーモア化反応	1.39	(0.78)	1.28	(0.62)	0.57
問題の解消度	3.45	(1.10)	3.68	(1.20)	-1.61
関係の変化	2.73	(1.14)	2.99	(1.05)	-1.67 †
結果に対する満足度	3.03	(1.17)	2.95	(1.22)	0.51
経験の評価	2.88	(1.29)	3.16	(1.08)	-1.78 †

†$p<.10$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

すなわち、表出経験について回答する場合の方が被表出経験について回答する場合よりも、相手との関係が疎遠になったと回答する傾向があった。問題の解消度には有意な差はみられなかった(t = −1.61, *ns*)。最後に表出の結果生じる心理的効果については、経験の評価に有意な差の傾向がみられた(t = −1.78, p<.10)。すなわち、表出経験について回答する場合の方が被表出経験について回答する場合よりも、その経験を悪いものと回答する傾向があった。結果に対する満足度には有意な差はみられなかった(t = 0.51, *ns*)。

考 察

本研究の結果より、対象者が表出経験について回答する場合は、被表出経験について回答する場合よりも、挑発による被害が大きく、これまでに何度も同様の被害を受けており、被表出者の責任を大きく帰属する一方で、怒り表出による被表出者の被害は小さく、表出反応は比較的穏やかで正当なものであったにも関わらず、被表出者は責任を受け入れずネガティブな結果に帰結した経験を回答する傾向がみられた。これらは Baumeister et al.(1990)の結果とほぼ一致しており、仮説は概ね支持された。Baumeister et al.(1990) 、Kowalski(2000)、Zechmeister & Romero(2002)では、経験の相手の属性が回答傾向に及ぼす影響を除外するような手続きは取られておらず、本研究においてもみられたように、表出経験と被表出経験では相手の属性の質がもともと異なるために、回答傾向に差が生じたという解釈も可能であった。本研究においては、対象者が同じ属性を取る可能性の高い経験のみを抽出しているにもかかわらず同様の傾向がみられ、この結果は被害者バイアスの妥当性をよりいっそう高めたと言えよう。Baumeister & Newman(1994)は、個人が自己の経験を語る際にはそれを意味づけようとする動機が働くとしているが、その意味づけの内容として、被害者バイアスを典型とする「正当化」による意味づけを指摘している。現実の怒り表出場面で、被害者バイアスに基づいて双方が自己の正当性と相手の不当性を主張した場合、対人葛藤がよりいっそう深刻化するとも考えられ、こうしたバイアスを促進する、あるいは抑制する要因についても今後検討すべき課題である。

本研究の限界としては、まず結果の一般化可能性の問題がある。本研究では大学生、専門学校生のみを対象としており、こうした限定された対象者から得られた結果を過度に一般化することは厳に慎まねばならない。また、本研究で得られた回答傾向の差が、怒りの経験時から回答にいたる時間的プロセスの中のどの時点で生じているのかについては明らかにすることはできない。すなわち、こうしたバイアスは経験時の状況認知の段階ですでに生じているのか、それとも記憶内容の変容によるものなのか、あるいは調査に回答する時点での経験の選択や歪曲によるものなのかについては、今後さらに検討していく必要がある。状況認知における加害者と被害者の差を検討している立場(例えば、Mummendey et al., 1984; Mummendey & Otten, 1989)、記憶の変容について時系列的に検討している立場(例えば、McGregor & Holmes, 1999)、経験を語る際の動機を重視する立場(例えば、Baumeister et al., 1990; Toch, 1993)などから得られている知見を整理した上で、統合的なモデルを構築していくべきであろう。いずれにせよ、何らかの原因によって回答される経験の内容に差の生じることが本研究の結果からも明らかになっており、同じ対象者に表出経験とともに被表出経験を尋ねることは、エピソード法における立場のバイアスを検出する上で有効な手法と考えられる。特に、怒りを表出した結果、被表出者の心理や二者関係にどのような変化が生じるかなどを検討する際には、表出者の立場から語られた経験のみでは現象を一方的に偏った形でとらえてしまう可能性が高く、こうした規定関係については両者にどのようなバイアスが存在するかを把握した上で慎重に検討していくべきであろう。

引用文献

阿部晋吾・高木修 2002 怒り表出の対人的効果を規定する要因 関西心理学会第 114 回大会発表論文集, 46.

Averill, J.R. 1982 *Anger and aggression: An essay on emotion.* New York: Springer-Verlag.

Baumeister, R.F. 1997 *Evil: inside human violence and cruelty.* New York: W. H. Freeman.

Baumeister, R.F. & Newman, L. S. 1994 How stories make sense of personal experiences: Motives that shape autobiographical narratives. *Personality and Social Psychology Bulletin,* **20**, 676-690.

Baumeister, R.F., Stillwell, A., & Wotman, R. 1990 victim and perpetrator accounts of interpersonal conflict; Autobiographical narratives about anger. *Journal of Personality and Social Psychology,* **59**, 994-1005.

Gergen, K.J. & Gergen, M.M. 1988 Narrative and the self as relationship. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (vol.21). San Diego, CA: Academic Press. pp.17-56.

木野和代 2000 日本人の怒りの表出方法とその対人的影響 心理学研究, **70**, 494-502.

Kowalski, R.M. 2000 “I was only kidding!”: Victims’ and perpetrators’ perceptions of teasing. *Personality*

and Social Psychology Bulletin, **26**, 231-241.

McGregor, I., & Holmes, J.G. 1999 How story telling shapes memory and impressions of relationship events over time. *Journal of Personality and Social Psychology,* **76**, 403-419.

Mikula, G., Athenstaedt, U., Heschgl, S., & Heimgartner, A. 1998 Does it only depend on the point of view? Perspective-related differences in justice evaluation s of negative incidents in personal relationships. *European Journal of Social Psychology,* **28**, 931-962.

Mummendey, A., Linneweber, V., & Löschper, G. 1984 Actor or victim of aggression: divergent perspectives - divergent evaluations. *European Journal of Social Psychology,* **14**, 297-311.

Mummendey, A. & Otten, S. 1989 Perspective-specific differences in the segmentation and evaluation of aggressive interaction sequences. *European Journal of Social Psychology,* **19**, 23-40.

大渕憲一 1993 セレクション社会心理学－9:人を傷つける心－攻撃性の社会心理学－ サイエンス社

大渕憲一・小倉左知男 1984 怒りの経験(1): Averill の質問紙による成人と大学生の調査概況 犯罪心理学研究, **22**, 15-35.

Toch, H. 1993 Good violence and bad violence: Self-presentations of aggressors through accounts and war stories. In R.B. Felson & J.T, Tedeschi (Eds.), *Aggression and violence: A social interactionist perspectives.* Washington, D.C.: American Psychological Association. pp.171-192.

Zechmeister, J. S. & Romero, C. 2002 Victim and offender accounts of interpersonal conflict: Autobiographical narratives of forgiveness and unforgiveness. *Journal of Personality and Social Psychology,* **82**, 675-686.

註

1)本研究の一部は、日本心理学会第 66 回大会において発表された。

The influences of differences in expressive and expressed viewpoints on the answer tendency about experience of anger

Shingo Abe (*Graduate school of Sociology, Kansai University*)
Osamu Takagi (*Faculty of Sociology, Kansai University*)

In this study, participants were asked to answer both experiences that they expressed anger to someone and someone expressed anger to them, and were examined whether differences in the answer tendencies of anger experience would be found between expressive and expressed positions. As a result, when answering about anger expressive experience, participants tended to answer that the damage by provocation was more serious and more continuous, the responsibility belonged to the expressed person was greater, the damage by anger expression was smaller and more justified, and the experience ended more negative result than when answering about an expressed experience. These results suggested that the motivational tendencies of self-justification exist in both viewpoints of an anger expressive person and an expressed person.

keywords：anger expression, self-justification, perspective difference, victim, perpetrator